

三貫梨遺跡

— 第1次発掘調査 —

1986

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は、一般国道352号線道路改良工事に伴い、長岡市教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した「三貫梨遺跡」の第1次発掘調査の記録である。

この遺跡は長岡市東部の東山丘陵から流れる栖吉川右岸に発達した小規模な河岸段丘上に所在し、今回の発掘調査から縄文時代（晩期）の土壙・ピット及び中世（宝町時代）の火葬墓・土葬墓などが発見され、とりわけ火葬墓・土葬墓から当時の村人の生活領域の一端が確認されたことは、中世の文化を知る上で貴重な手懸りを得ることができた。

この記録が地域の文化財に対する理解と認識を深め、また学術研究のために、活用され役立つことを念願すると共に、今回の調査にあたり、多大なる御援助、御協力をいただいた県教育委員会はじめ県土木部道路建設課、長岡土木事務所工務第1課及び関係者に対し、心からお礼申し上げます。

昭和61年3月

長岡市教育委員会
教育長 丸 山 博

例　　言

1. 本書は国道352号線の改良工事に伴って実施された新潟県長岡市栖吉町字清水田（通称「三貫梨」）に所在する三貫梨遺跡と長者塚の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は新潟県の委託を受け、長岡市教育委員会が主体となって実施した。なお、発掘調査に先立って新潟県教育庁文化行政課戸根与八郎主任の指導で、確認調査を実施した。
3. 遺跡・遺構の写真撮影・実測および、遺物の整理から図版の作成まで駒形を中心とし調査従事者の全員であたった。なお、石器・石製品の実測は、新潟大学学生小熊博史・川崎裕美・桑原陽一・小林隆幸の四君による。
4. 出土人骨の鑑定は日本歯科大学新潟歯学部高橋正志講師に依頼した。また、高橋氏からは玉稿を賜り、本書に掲載させていただいた。
5. 本書は駒形・小林が分担執筆したもので、駒形が全体をまとめ、文責は文末に記した。
6. 採図のうち、断面図わきの数字は標高を示す。単位はメートルである。
7. 発掘調査から本書の作成まで、次の方々や機関をはじめ、多くの方々から御教示・御指導・御協力を賜った。ここに心よりお礼を申し上げます。（五十音順・敬称略）
阿部洋輔 甘粕健 石原正敏 稲川明雄 岩崎均 金子達 鈴木昭英 戸根与八郎
中島栄一 中野豈任 中村孝三郎 鳴海忠夫 藤木久志 藤沢典彦 前山精明
山口栄一 吉井敏幸 若松茂

栖吉町内会 新潟県長岡土木事務所 法務省新潟少年学院

8. 発掘調査の体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）

調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会）

調査補助員 小林義廣、小熊博史（新潟大学学生）

事務局 大久保憲次 桝倉末作 鈴木孝行 五十嵐整 労賀代志榮（長岡市教育委員会社会教育課）

目 次

I. 調査の経緯.....	1
1. 調査に至るまで.....	1
2. 発掘調査の経過.....	1
II. 環 境.....	2
III. 造構・遺物.....	5
1. 繩文時代.....	5
(1) 造構 (2) 遺物	
2. 中世.....	8
(1) 土葬墓 (2) 火葬墓 (3) 火葬場推定跡 (4) 遺物	
3. 近世の陶磁器.....	19
4. 長者塚.....	20
IV. 三貫梨遺跡出土の人骨について.....	22
V. ま と め.....	24
1. 繩文時代の三貫梨.....	24
2. 中世の墓地について.....	24
3. 三貫梨墓地の被葬者の性格について.....	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺の地形図	4
第3図 遺構全体図	4・5
第4図 縄文時代の遺構	5
第5図 石鐵	6
第6図 縄文時代の遺物	7
第7図 第I土葬墓群	8
第8図 第II土葬墓群(1)	9
第9図 第II土葬墓群(2)	10
第10図 土葬墓(1)	11
第11図 土葬墓(2)・火葬墓	13
第12図 火葬場推定跡	15
第13図 銭貨	17
第14図 金属製品	18
第15図 中世の土器	19
第16図 長者塚断面図	20
第17図 長者塚全剖面図	21
第18図 長者塚の基底部	21

図 版 目 次

図版第1図 遺跡遠景
図版第2図 出土状況
図版第3図 土葬墓群
図版第4図 土葬墓
図版第5図 火葬墓・火葬場推定跡
図版第6図 出土品
図版第7図 長者塚

I. 調査の経緯

1. 調査に至るまで

昭和60年2月21日「ふるさと 長岡のあゆみ」編集のため、各地区公民館館長に資料の提供などを依頼する説明会を文化行政室分室が開いた。その席上で三貫梨城跡と長者塚が国道352号線の改良工事の法線内に含まれていることを聞き込む。長岡市教育委員会は早速にこのことについての確認を長岡土木事務所に対し行う。昭和59年度の交渉はこれで終わり、長岡市教育委員会は昭和60年度には工事が行われないものと思っていた。ところが、5月に入り長岡土木事務所から遺跡についての協議を行いたい旨の連絡があり、5月28日新潟県教育庁文化行政課に関係者が参集して第1回目の話し合いをもった。そこでは法線内に2遺跡が所在すること、確認調査は文化行政課の指導を得て長岡市教育委員会が実施することなどを確認した。そして、7月8日から10日まで文化行政課の戸根与八郎主任を指導者として確認調査を行い、縄文土器・火葬骨などを発見するが、城館跡を裏付ける資料は発見されなかつた。このため、法線にかかる遺跡は三貫梨遺跡と長者塚の2遺跡と変更した。7月11日、再度文化行政課に関係者が集まり、本調査の時期・費用それに調査の主体者などについての話し合いをする。調査は長岡市が新潟県の委託を受けて8月下旬から行うことで合意をみた。

2. 発掘調査の経過

8月19日 新潟少年学院の用地内に現場事務所を開設し、調査機材を搬入することから、調査を開始した。19日に長者塚の測量を行い、21日から2遺跡の発掘に入る。長者塚は火葬骨と礎数個を基底部で検出して23日に終わる。

三貫梨の発堀は西側の崖から法線幅に沿って表土除去作業を進めた。作業中に灰混じりの火葬骨と3枚もしくは6枚一組の中中国からの渡来銭を検出する。また、地山に入っていた埋甕と思われる縄文土器の底部を発掘する。この表土除去作業は9月7日に終わり、遺構の発掘に入る。ところが、当初予測しなかった土葬人骨が7日に方形プランの土壙から発見された。このため、再び渡り地山面での土葬墓確認のジョレン掛けを行うなど、調査の主力は土葬墓の調査に移った。そして、人骨の鑑定等の調査を日本歯科大学新潟歯学部高橋正志講師に依頼した。高橋氏が遺跡にこられた9月17日に円形のピットから乳児の歯と布に包まれた渡来銭が出土した。その後、火葬墓の下にも土壙が掘られていることや、火葬墓の下に土葬墓があることがわかった。また、遺跡の東端で土葬墓群より一段低いテラス状のところに規模の大きい焼土の広がりがあり、火葬場跡と推定して調査を進めた。そこでは釘や珠洲系土器・ピットなどを発見する。10月4日には現場の調査を全て終わる。

(駒形)

II. 環 境

長岡市の東には通称「東山」と呼ばれる猿倉岳・銅山・八方台などの500~700m級の山地が南北に連なっている。この山地は魚沼丘陵の一部で、柄尾市や山古志村との分水嶺をなしている。この東山から長岡市の中央部を北へ流れる信濃川に向かって、太田川・柿川・栖吉川などの小河川が東山の裾を横切って流れ込んでいる。この東山がある信濃川右岸は左岸と異なり、河岸段丘はあまり発達しておらず、東山の裾部が直接沖積地に接している。そして、小河川が沖積地に顔を出すあたりの東山の裾部に谷口扇状地を形成し、太田川では村松町、栖吉川では普濟寺を中心とする栖吉町などの中世以来の集落が展開している。

三貫梨は東山に源を発する栖吉川の右岸で、わずかに発達している標高60mの河岸段丘上に立地している。三貫梨は段丘の南西部に位置し、南と北は栖吉川によって削られた急崖となり、独立丘陵のような悠久山に続く北側に小谷があり、東は栖吉川の谷口扇状地へながらに立ち上がっていく。栖吉川は鉢伏の丘陵と悠久山とに挟まれた狭いところを蛇行しているため、三貫梨から沖積地への眺望は悪い。なお、現状は畠地および杉林で、周囲——特に東および北側は水田になっている。本遺跡は畠地一帯に広がっていると思われ、その面積は約7000m²と推測される。長者塚は三貫梨遺跡の北西部で段丘崖の上に位置していた。三貫梨は金原大膳の居館跡、長者塚は親王墓、という伝承がそれぞれ残されている。

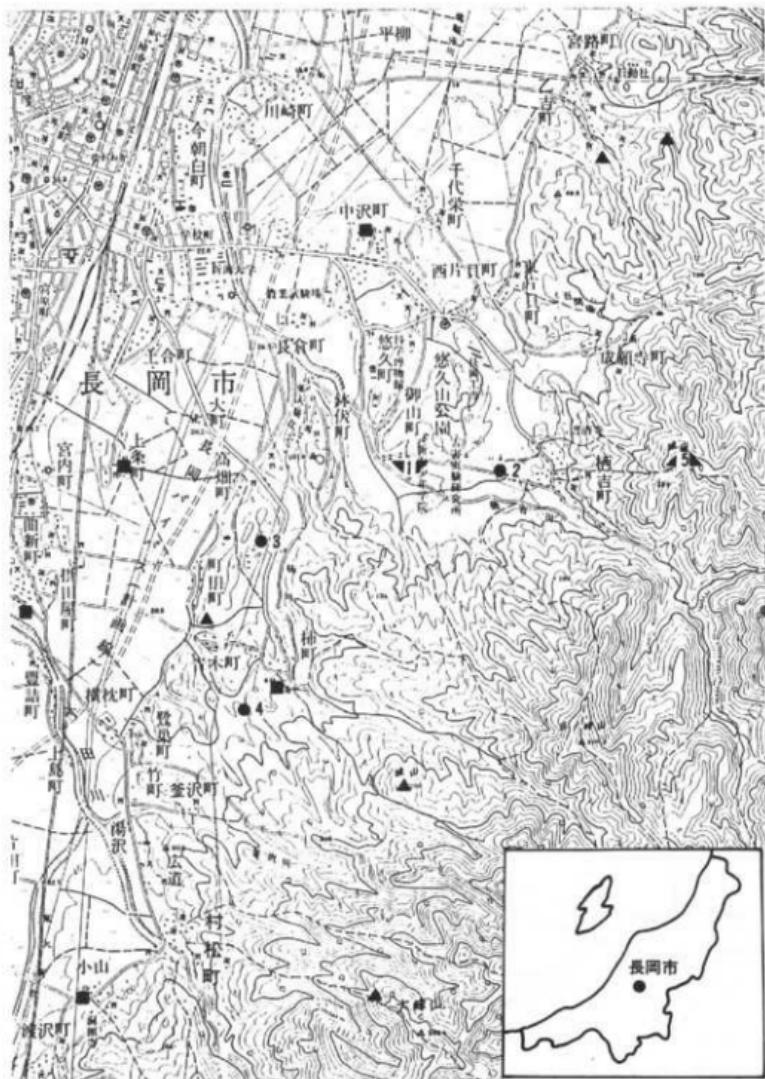
ところで、東山の縄文遺跡は長岡では数少ない前期の金倉をはじめ、中期の山下、後・晚期の大明神、晚期の高畠などがある。いずれも東山の裾部より少し奥まった位置にあり、信濃川左岸の馬高・三十畠場、岩野原、藤橋などの大集落が立地する河岸段丘上の遺跡群とは立地条件などの様相を異にしている。

また、東山一帯には三貫梨の後背地にある古志長尾氏の柄吉城をはじめ、高津谷城や柿城などの山城跡や、上条館などの居館跡が数多く点在している。それに村松町には永正10(1513)年作の薬師如来や、大永6(1526)年銘の十二神将の円融寺、釜沢町には応永24(1417)年銘の鰐口を伝える觀音堂が所在し、柄吉には古志長尾氏の祈願所の普濟寺がある。その他、釜沢町には戦前に甕や摺鉢・刀子などを出土した経塚の糖塚(註1)が所在していた。

なお、中世には柄吉は高波保上条、柄吉川を挟んで三貫梨と対岸の鉢伏は村松町、釜沢町と同じ櫛脱莊であるといわれている。

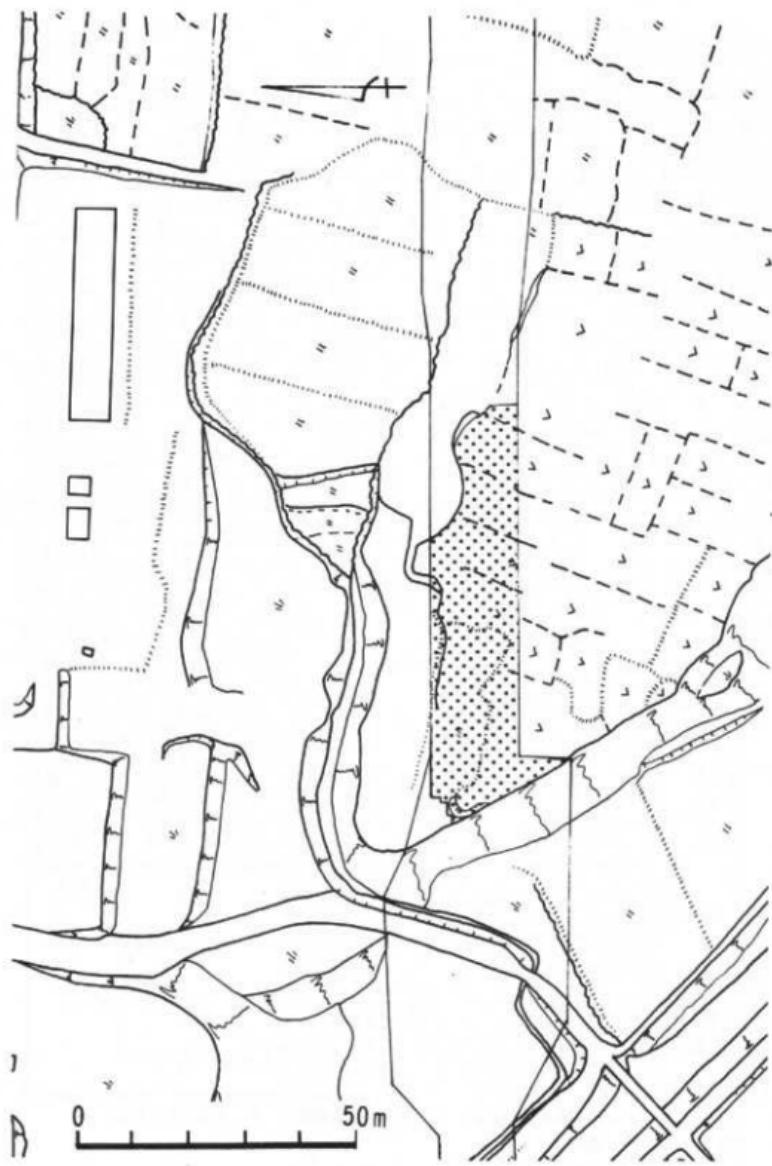
(駒形)

註1. 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館 1965年

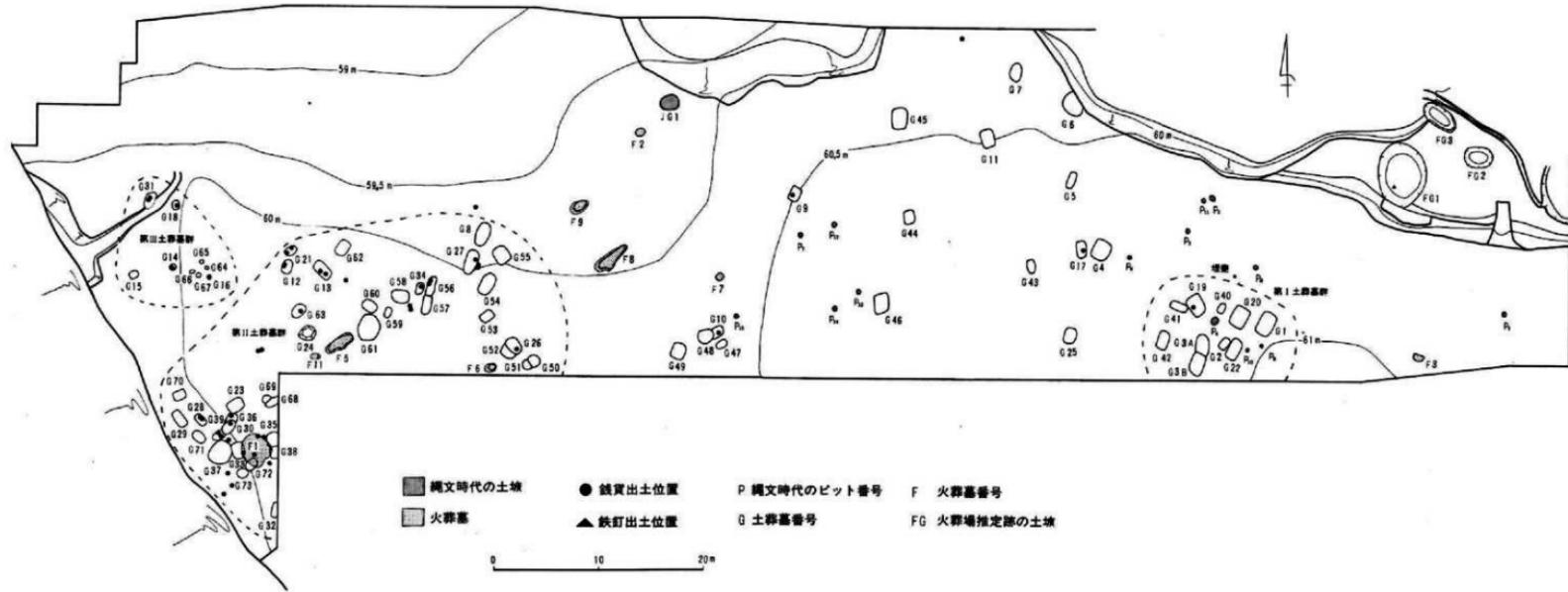


1. 三貴梨 2. 大明神(繩文後・晚期) 3. 高畠(繩文晚期) 4. 金倉(繩文前期)
5. 栖吉城 ▲山城 ■城館

第1図 遺跡位置図 (1:50000 長岡)



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 造構全体図

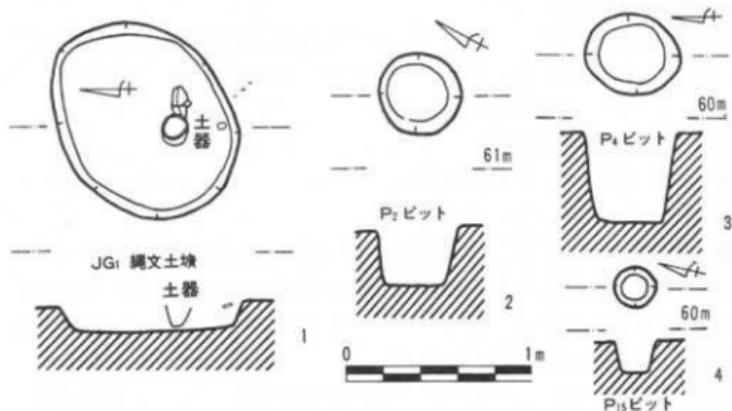
III. 遺構・遺物

1. 縄文時代

(1) 遺構 縄文時代の遺構としては、土壙1基、ピット14基、埋甕1基がある。いずれも発掘区の北東側に点在する。

●土壙（図版第2図2 第4図1） 土壙は発掘区中央から北側の沢よりの位置で、緩い斜面に掘られていた。形態は橢円形を呈し、長径128cm×短径91cm、深さ18cmの浅く掘り込まれた皿状である。土壙内の南側で、土壙底面より2cmほど浮き上がった状態で縄文晩期の完形土器（第6図8）が出土した。

●ピット（第4図2～4） ピットは14基発見されたが、発掘区中央より東側の平坦面に集中していた。ここは中世の土葬墓が多く所在していたところでもある。形態は円形を呈し、直径が25～55cm、深さ15～50cmのものがほとんどであった。P2は長径48cm×短径43cm、深さ50cmで、縄文を施文した土器が数点出土している。P4は長径53cm×短径43cm、深さ50cm



第4図 縄文時代の遺構

のビットで縄文の土器が含まれていた。この他に土器が出土したビットはP1・3・5~7の4基があり、P3から縄文前期後半の諸磯式期に比定される土器（第6図4）が出土した。他は時期が比定できないものばかりであった。

●埋甕（図版第2図1） 発掘区中央部東側で、地山面から3cmほど掘り込まれた状態で土器の底部（第6図18）が発見された。土器の上部は耕作によるのか残存せず、時代は推定できない。埋甕が所在していた周辺は土器も含め炭化物などは無く、埋甕として使用されていたとは考えられない。土器内の覆土には炭化物などは含まれていなかった。（小林）

（2）遺物（第5図・第6図） 縄文時代の遺物は土器が平箱半分、

石器・石製品が7点などがあるだけで、量的には少ない。



●縄文前期の土器（第6図1~6） 主として竹管による文様の土

器で、前期後半の竹管文系土器群のものである。1は3条の浮線間に

第5図 石鎌

刻み目がみられる諸磯b式に類似する文様であろう。2~4は半截竹管文の土器で、2は拓影右側にヘラによる格子目文がみられ、3は縄文を地文としている。5は密な撚糸文の上に竹管の背で文様を描いている。6は口縁部破片で、数条の沈線が口縁と平行に走り、炭化物が多く付着していた。2~6は諸磯c式に併行するものと考えられる。なお、2・6は第1号土葬墓の覆土から、3はP2、4はP3の出土である。

●縄文中期の土器（第6図7） 浅鉢の頸部付近の破片で、内傾する口縁部に半截竹管で文様を描いている。中期前半の土器かと思われる。

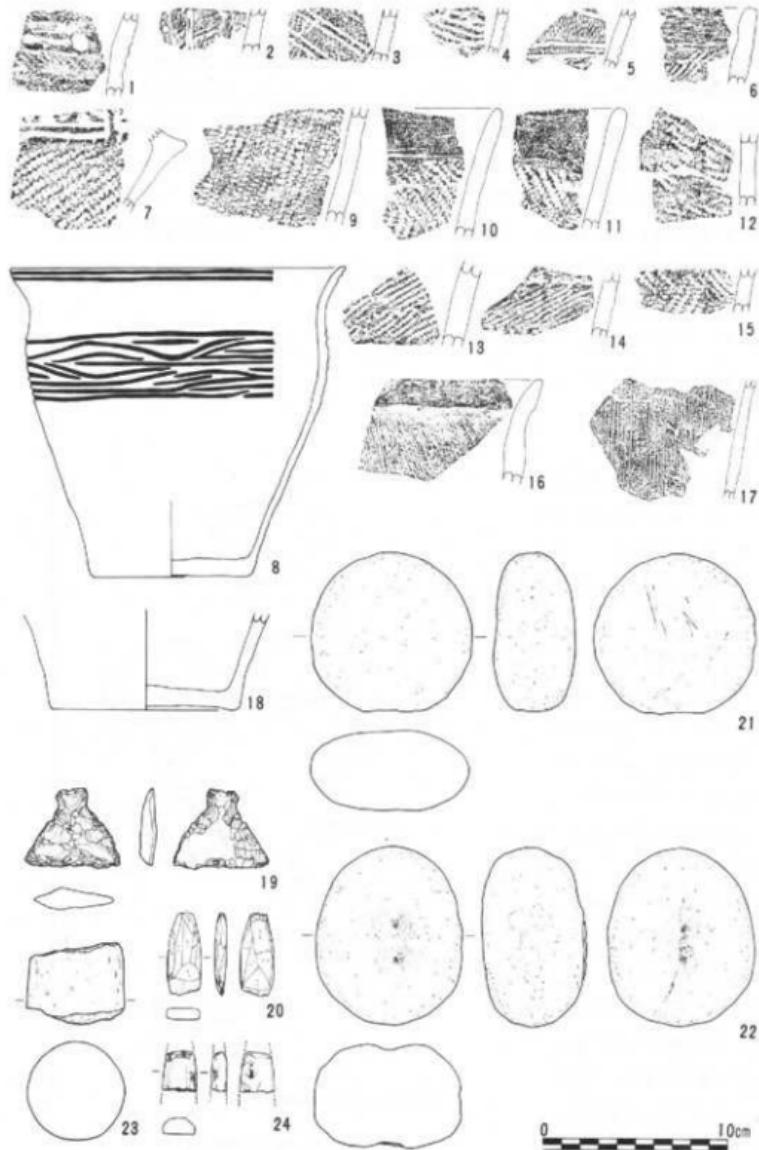
●縄文晚期の土器（第6図8） 土壌出土の小型の深鉢である。土器の内外面共に炭化物が多く付着していた。沈線による菱形文を基本とした文様が胴上半部にあり、晩期中葉の大洞C2式期のものと思われる。

●粗製土器（第6図9~17） 斜縄文（9~11）や綾絡縄文（12~14）、羽状縄文（15）、撚糸文（16）それに櫛描き文（17）の土器をここに集めた。15の羽状縄文は一本の原体によって出来ている。なお、三貫梨の縄文土器は前述のように、前期・中期・晩期に分けられるため、粗製土器の時期が何に属するのかは不明と言わねばならない。

●埋甕の土器（第6図18） 第1号土葬墓群に近い位置にあった埋甕に使用された土器で、無文の底部しか残っていない。

●石器（第5図・第6図19~22） 第5図は小型の凸基有茎式石鎌、第6図19はほぼ二等辺三角形を呈する石匙、20は小型の磨製石斧、21は敲打痕もみられる円形の磨石、22は両面に2個一対の凹みがある凹石で、両側面にも浅くてはっきりしない凹みがある。石器は粗製土器と同じく時期を比定することができない。

●石製品（第6図23・24） 石棒の一部と思われる円筒形の破片（23）と、断面がカマボコ形をしている石剣の破片（24）が出土した。石剣は晩期の所産かと思われる。（駒形）



第6図 縄文時代の遺物

2. 中世

中世の時間に伴う遺構としては土葬墓・火葬墓・火葬場推定跡などが発見されている。

(1) 土葬墓（図版第3・4図 第8~11図） 人の生骨を伴う土壙を土葬墓としたが、土壙内に生骨がないものでも、土葬墓と同じ形態の土壙を土葬墓とした。今次調査では74基が発見された。このうち生骨や歯が埋葬されていたのは27基、銭貨や漆などの副葬品と思われるものが埋納されていたのは22基で、生骨と副葬品が供伴するのは12基であった。

土葬墓の形態には長辺90cm以上の方形や楕円形のもの、長辺が90cm未満の方形や楕円形のもの、それに直径40cm未満の円形のものの三種類に分類される。これは成人・小児・乳児の別によって埋葬された結果かと思われる。

なお、遺跡全体を調査していないため即断はできないが、74基の土葬墓は位置的にまとまりがみられ、第I~III群に分類した。

第I 土葬墓群（第7図）

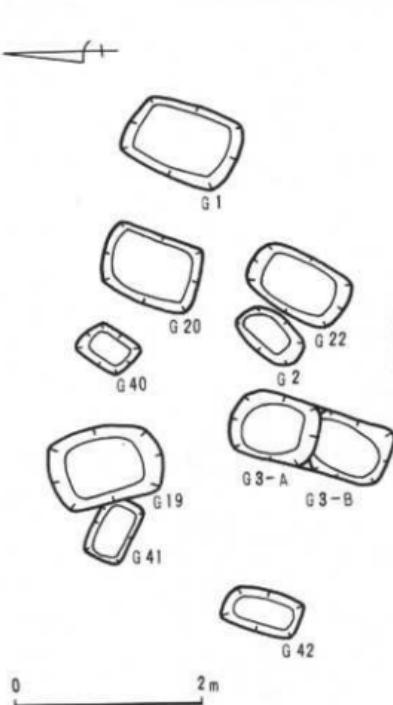
調査地の東側の一番高いところにある10基の土葬墓を第I群とした。形態はすべて方形で、6基に生骨、2基に副葬品が埋納されていた。

●第1号土葬墓（第10図）

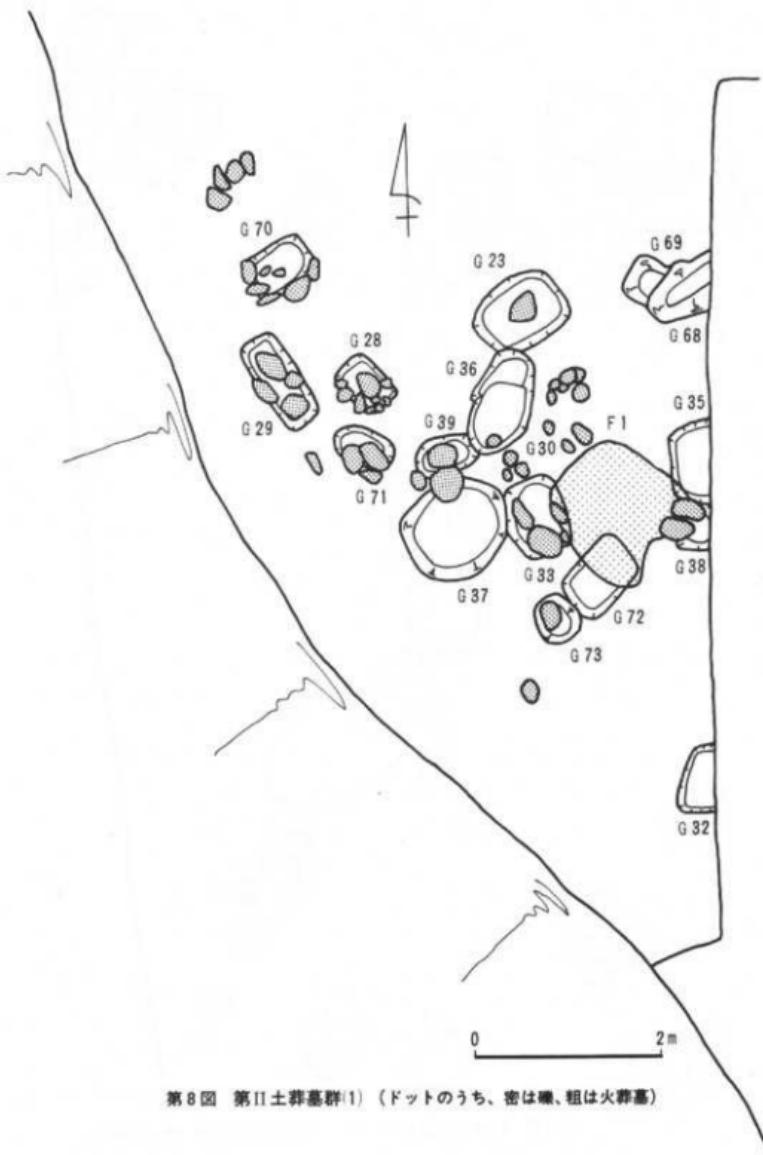
長辺120cm×短辺85cm、深さ50cmの長方形で、遺体は頭骨を北東に向け、右側が下向きになっている屈葬姿勢であった。遺体の推定年齢は50~60歳位で、男性である。

●第3号土葬墓（第10図）

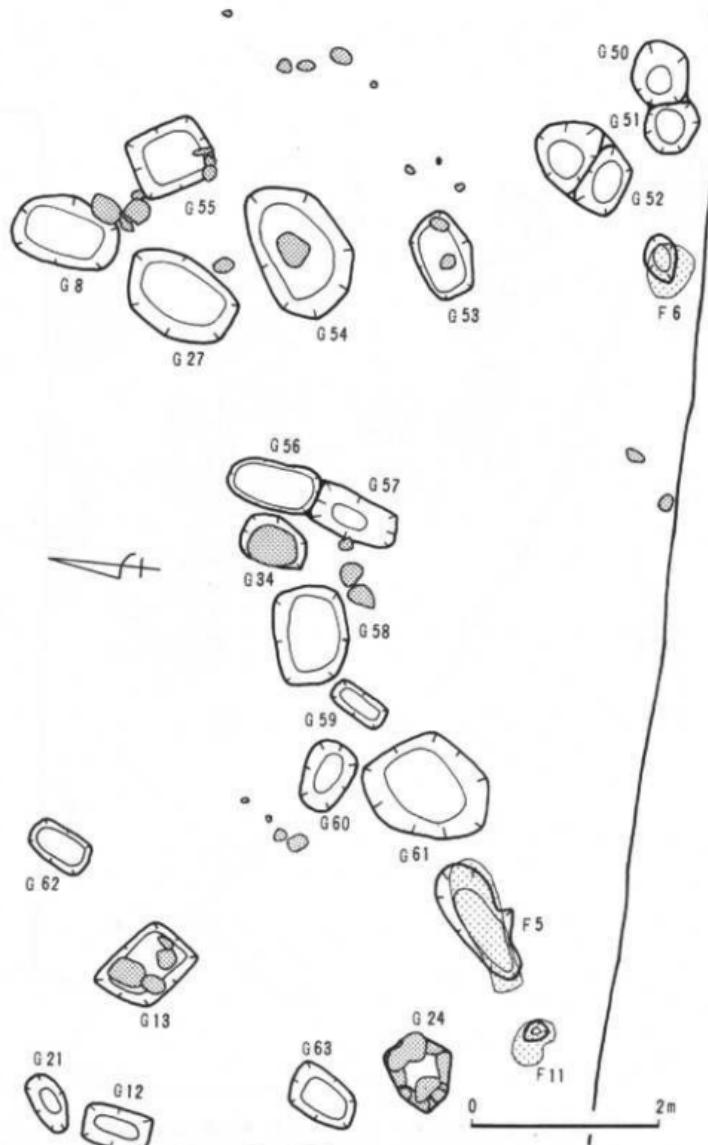
2基の土葬墓が切り合っており、北から第3A・B土葬墓とした。A・Bの長辺は切り合いで不明だが、A・Bを合わせた全長は175cmである。短辺はAが70cm、Bが65cm、深さはAが50cm、Bが45cmを



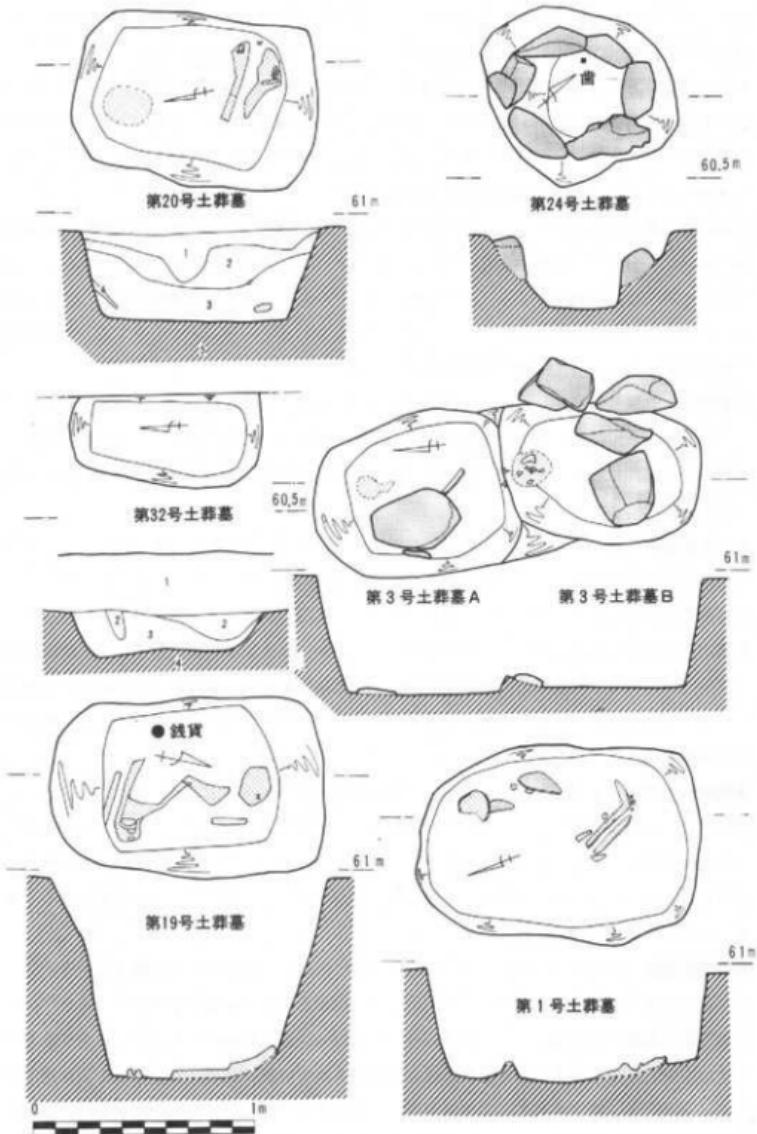
第7図 第I 土葬墓群



第8図 第1土葬墓群(1) (ドットのうち、密は礫、粗は火葬墓)



第9図 第II土葬墓群(2) (ドットのうち、密は埋、粗は火葬墓)



第10図 土葬墓(1) (ドットのうち、密は礫、粗は遺体)

測る。A・Bとも土葬墓上面に石組があった。遺体の向きはいずれも北東を向いている。推定年齢はAが50~70歳、Bが30~40歳位で、性別はA・Bともに女性である。

●第19号土葬墓（第10図） 長辺120cm、短辺80cm、深さ90cmの長方形で、土葬墓の中では最も深い。遺体は頭骨を北西に向け、右側を下にする屈葬である。墓壙の中央部西側で6枚一組の銭貨が副葬されていた。銭種は淳化元宝1、熙寧元宝2、景德元宝1、祥符元宝1、政和通宝1である。被葬者は50~70歳の女性であった。

●第20号土葬墓（第10図） 形態は長辺105cm、短辺75cm、深さ45cmの長方形で、遺体は50~70歳位の男性で、頭部を北東に向け、右側を下にした屈葬の姿勢であった。なお、土葬墓内の土層序は次の通りである。1は腐植の進んだ黒色土に粒状の黄褐色土を含む。2は黒色土に團塊状で粘質の黄褐色土を含む。3は黄褐色土に点々と黒色土が混在する。4は腐植の黒色土である。5は地山で明茶褐色粘質土である。

●第22号土葬墓（第11図） 人骨は良好な遺存状態で、頭部を北東に向けて右肩を下にした屈葬である。墓壙西側中央部から漆模の断片が検出されたが、細片のため原形は不明である。土壙は長辺110cm、短辺65cm、深さ35cmの長方形である。推定年齢は30~50歳で、男性と思われる。

第II土葬墓群（第8・9図） 発掘区西側から東にかけて39基の土葬墓が集中しており、これを第II土葬墓群とし、この内、生骨が検出されたのは14例で、生骨に副葬品が伴ったのは6例、副葬品のみが7例である。形態は長方形、楕円形があり、配石が伴うものもあった。

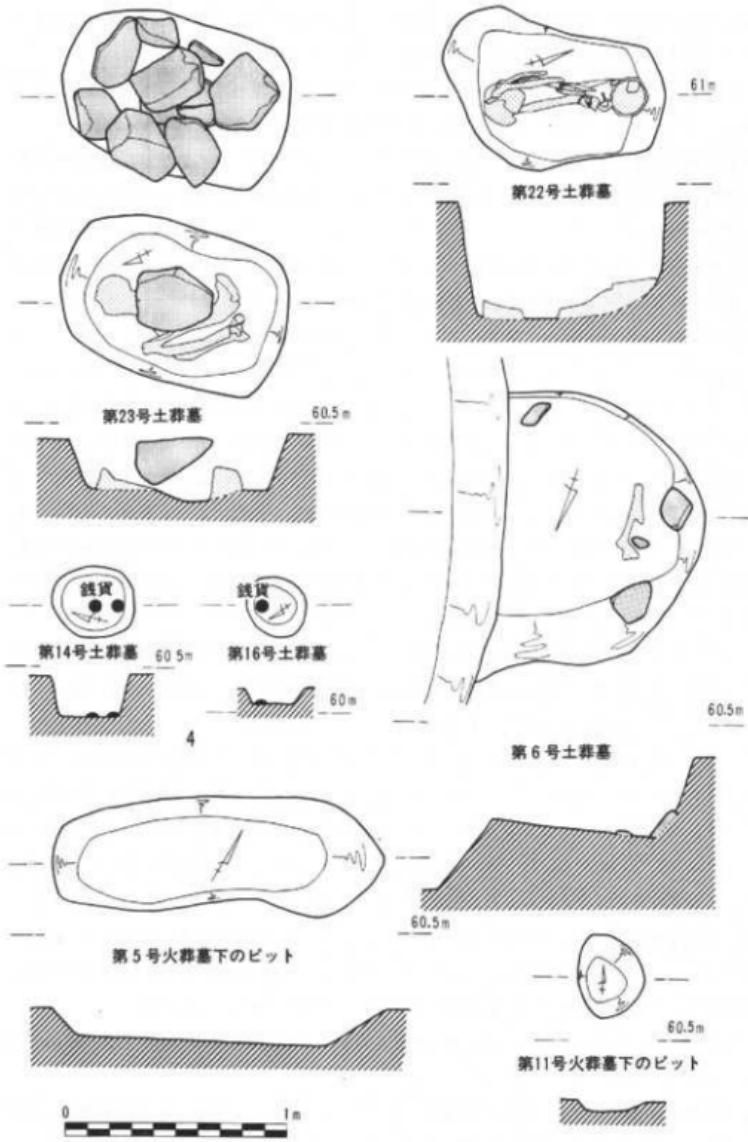
●第23号土葬墓（第11図） 長辺98cm×短辺71cm、深さ26cmの長方形をなす。南側を36号墓が切っている。土壙の上面を人頭大の河原石で前面を覆い、さらに人骨の胸部には30cm大の河原石がおかれていた。人骨は頭部を北東に向け、右骨を下にした屈葬である。推定年齢は50~70歳で女性である。

●第32号土葬墓（第10図） 遺構の半分が調査範囲外にあったため完掘はできなかった。土層序は次の通りである。1は耕作土で腐植の強い砂質混じりの黒色土である。2は黒色土に粒状の黄褐色土を含む。3は明茶褐色土で粘質であるが軟らかい。4は地山で明茶褐色の粘質土である。長辺86cm×短辺41cm（現存長）で深さ20cmである。人骨の推定年齢は6~8歳くらいで性別は不明である。

第III土葬墓群（図版第3・4図） 発掘区北西側に円形土壙6基と方形土壙3基が検出された。9例中生骨に副葬品を伴っていた例が1例、副葬品のみの検出例が3例であった。

●第14号土葬墓（第11図） 長径35cm×短径32cm、深さ19cmのやや円形を呈する墓壙である。中から3枚ずつ重なって6枚の銭貨が副葬されていた。銭種は開元通宝1、景德元宝1、治平元宝1、熙寧元宝1、元豐通宝1、元祐通宝1であった。人骨は検出されなかった。

●第16号土葬墓（第11図） 長径30cm×短径27cm、深さ7cmのやや円形の土葬墓で、副



第11図 土葬墓(2)・火葬墓 (ドットのうち、密は礫、粗は人骨)

葬品の布に包まれた銭貨6枚に生後9~10ヶ月の乳児の歯が布に付着した状態で検出されている。銭種は祥符通宝1、皇宋通宝2、熙寧元宝1、元祐通宝2であった。

その他として明確な集中が見られないが16基の土壤が確認されている。生骨が検出されたのは、7例、生骨に副葬品を伴った例が1例、副葬品のみの検出は3例であった。

●第6号土葬墓（第11図） 北東側の部分は沢の蛇行で切られており、長辺120cm×短辺90cmで深さ35cmを測る。頭部を北東にむけており、有効部位が少ないため年齢、性別は不明である。
（小林）

（2）火葬墓（図版第5図 第11図） 9基の火葬墓が確認され第1・5・6・11号火葬墓は第II土葬墓群の中に位置する。第3号火葬墓は調査地の東末端に、他の第2・7・8・9号火葬墓は調査地の中央部に位置する。なお、第4・10号火葬墓は欠番とした。

地表面にピットを持たないものが4基（第1~3・7号）、ピットを持つものが5基（第5・6・8・9・11号）である。ピットを持たないものは40cm×30cm位の範囲に焼骨が集中して検出される。そのなかで、第1号火葬墓は広がりが120cm×110cmと大きく、炭化木片も他の火葬墓に比べて多量である。火葬場としての機能を有していたか、もしくは火葬に付したものとの廻棄場所ではなかったかと思われるが、断定はできなかった。ピットを持つ火葬墓はその形態から2つに分類できる。Aは長辺150cm×短辺50cm位の長方形で深さは15cm位である。第5・8号火葬墓がそれで、Bは長辺40cm×短辺30cm位の楕円形で深さ5cmばかりの浅い掘り込みを持つ第6・9・11号に分類される。

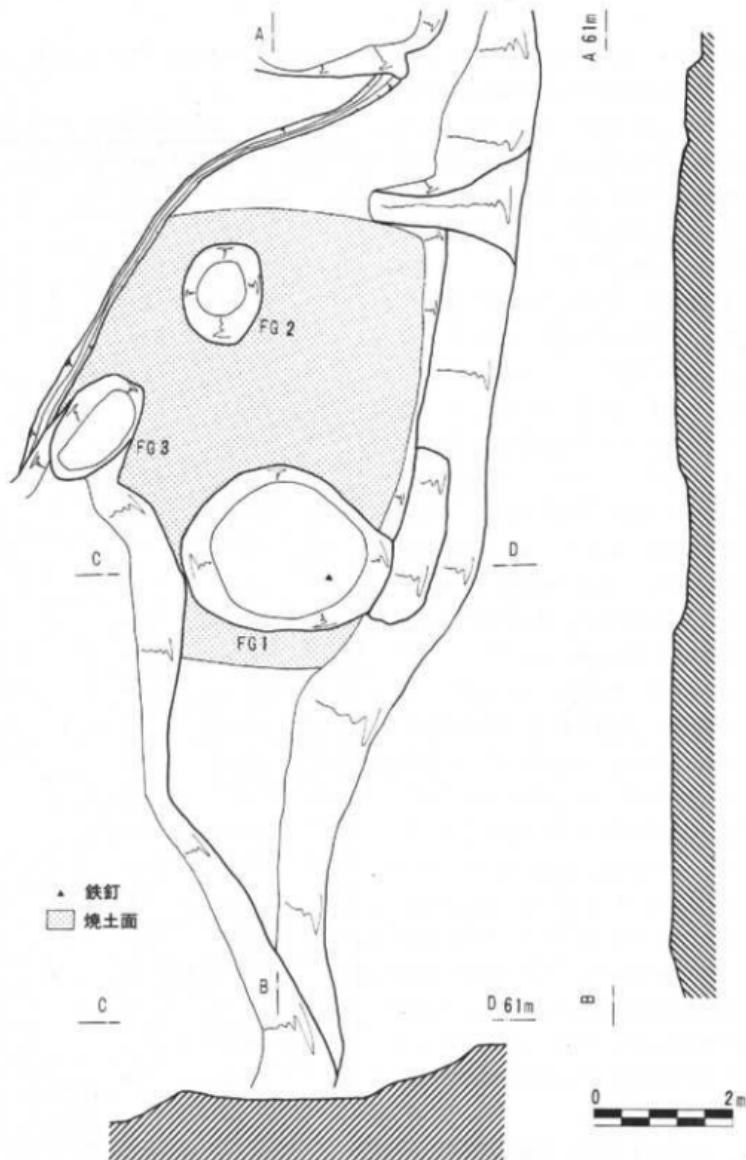
これらの火葬墓の被葬者の年齢や性別は、細片化した焼骨のため不明である。遺物は第1号火葬墓の被熱を受けた北宋銭5枚、明銭1枚、種別不明の銭貨が1枚と、鉄釘の1点が出土しただけで、土葬墓に比較して非常に少ない。

また、土葬墓のうち第24・33・34・36・37・39号土葬墓出土の人骨は高橋氏の鑑定で火葬に付されたものとの結果が出た。これらは土葬墓と同じ形態の土壤内に埋葬されていたものである。火葬墓にピットをもつものもあり、火葬骨が出土した土葬墓も火葬墓の範疇に入れなければならないのかもしれない。未鑑定および遺骨の出土しない土葬墓の中にもこれと同様に火葬墓の仲間に含まれるものも出てくるものと思われる。
（小林）

（3）火葬場推定跡（図版第5図・第11図） 発掘区の北東側で一段低くなるところに焼土面が640cm×620cmの広い範囲に2~3cmの厚さで認められた。焼土面の下から3基の土壤と通路と思われるものが焼土面の東側で南より北側にスロープを有して認められた。

このほかに排水路と思われる溝が焼土面を巡るように北側より東南に向かって、幅10~20cmで平均4~5cmの深さで認められた。

3基検出された土壤は、楕円形と細長い楕円形にわけられる。FG-1は長辺280cm×短辺240cm、深さ20cmの深い皿状の掘り込みを持つ楕円形土壤である。FG-2は長辺140cm×



第12図 火葬場推定跡

短辺120cm、深さ50cmを測る。楕円形で深い彫り込みを持つ土壙である。FG-3は長辺170cm×短辺100cmで深さ30cmの細長い楕円形である。

遺物としては縄文土器数点と珠洲系土器2点が検出された。縄文土器片は2次焼成が認められ、混入と思われる。珠洲系土器は擂鉢と甌の破片であり、14~15世紀に比定される。FG-1の上面で焼土中から、被熱を受けた和釘が1点検出されている。(小林)

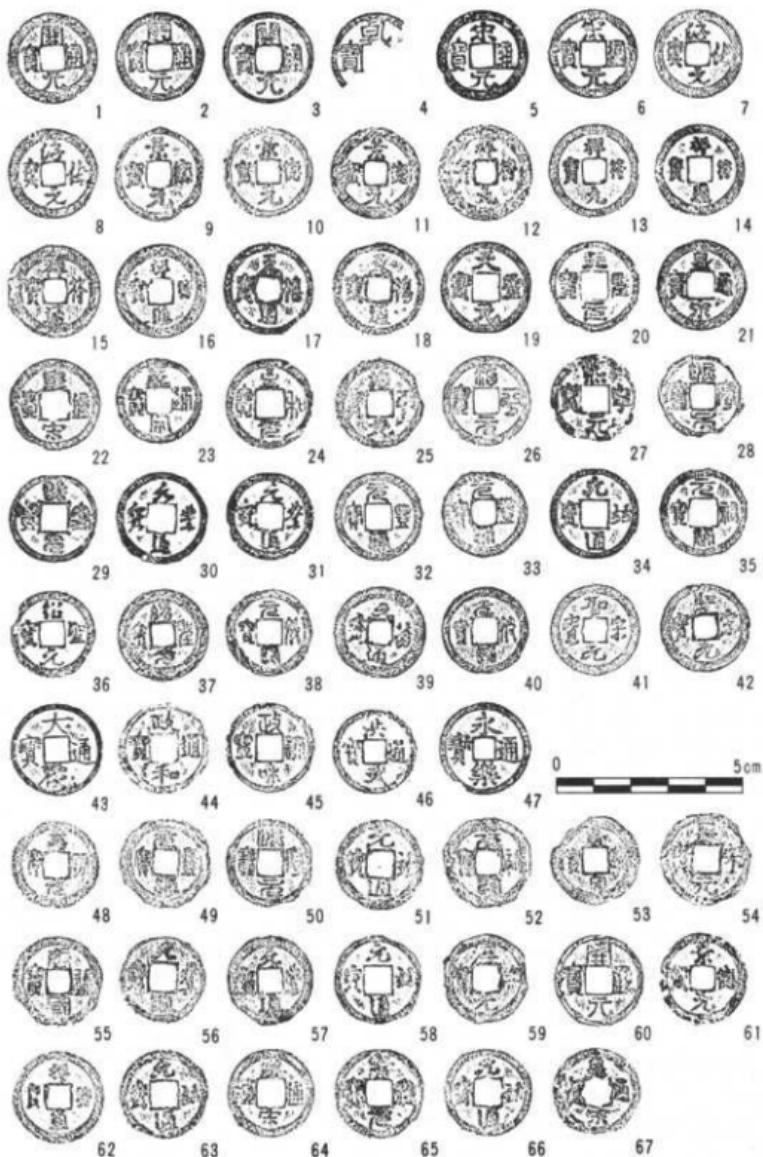
(4) 遺物 遺物としては銭貨、鉄製品、銅製品、土器類などが検出されている。

(4) 銭貨(第13図) 139枚の銭貨が土葬墓、火葬墓に伴つたりして出土した。銭貨の大半は青銅による腐蝕が著しく、保存状態の悪いものが多かったものの、銭種不明は9枚で130枚の銭貨の銭種が判明した。内訳は唐銭2種9枚(第13図1~4)、南唐銭1種1枚(第13図55)、北宋銭19種113枚(第13図5~45・48)、南宋銭2種2枚(第13図54・59)、明銭2種5枚(第13図46・47)であり、その中でも皇宋通宝、元豊通宝、元祐通宝の北宋銭の比率が高い。銭貨は2~7・14枚の複数で、土葬墓などから出土する例が多く、土葬墓別では1枚が第30・33号、2枚が第10・36号、3枚が第13・39号、4枚が第21号、5枚は第31・63号、6枚は第9・12・14・16・18・19・26・27・28・56号、7枚は第34号、14枚は第17号の各土葬墓に埋葬されていた。中でも6枚一組の出土例が最も多く、銭貨を出土した21例の土葬墓中の10例を数える。これは「六道銭」の風習を示すものと考えられる。また、2~7枚の出土例もこの六道銭の風習を念頭にいたのであろうか。

この他の土葬墓で、特異な銭貨の出土例は第17号土葬墓の「さし銭」(図版第2図4)と

鉢番号	銭種名	国名	初鑄年	土葬墓	火葬墓	土葬外	計
1~3 60	開元通宝	唐	621	7		1	8
4	乾元重宝	"	758	1			1
55	唐國通宝	南唐	959	1			1
5~6	宋通元宝	北宋	960	2			2
7~8	淳化元宝	"	990	1		1	2
9~11 61	景德元宝	"	1005	5	1		6
12~13	祥符元宝	"	1008	3	1	1	5
14~16 62	祥符通宝	"	1008	2		1	3
17~18 52	天禧通宝	"	1017	4			4
19~20	天聖元宝	"	1023	3		1	4
21~23 53, 64, 67	皇宋通宝	"	1039	18	1	4	23
24	至和元宝	"	1054	1			1
48	嘉祐元宝	"	1056	2			2
25~26	治平元宝	"	1064	2		1	3
27~29 50, 65	熙寧元宝	"	1068	9		2	11
30~33 49, 56, 57	元豐通宝	"	1078	13	2	2	17
34~35 51, 63, 66	元祐通宝	"	1086	12		4	16
36~37	紹聖元宝	"	1094	2			2
38~40 58	元符通宝	"	1098	3			3
41~42	聖宋元宝	"	1101	3		2	5
43	大觀通宝	"	1107	2			2
44~45	政和通宝	"	1111	1		1	2
59	淳熙元宝	南宋	1174	1			1
54	皇宋元宝	"	1253	1			1
46	洪武通宝	明	1368			1	1
47	永樂通宝	"	1408	1	1	2	4
—	不 明	—	—	7	1	1	9
	合	計		107	7	25	139

銭貨一覽表

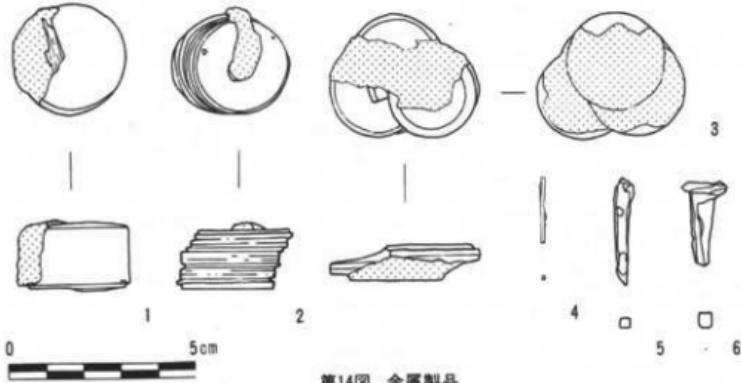


第13回 錢貨

第16号土葬墓の布に包まれた例（図版第2図5）がある。第17号土葬墓の銭貨は土葬墓中央の下部西側で、14枚の銭貨（第13図48～61）の孔に麻の紐が通っている「さし銭」の状態で出土した（第14図2）。さしの麻紐に結び目がないため上下関係は不明であるが、出土状態での上からみたさし銭の順序は嘉祐元宝（裏）・元豊通宝（裏）・熙寧元宝（表）・元祐通宝（表）・天禧通宝（裏）・皇宋通宝（表）・皇宋元宝（裏）・唐国通宝（裏）・元豐通宝（裏）・元祐通宝（裏）・淳熙元宝（裏）・開元通宝（裏）・景德元宝（裏）であった。第16号土葬墓の布包み銭貨（第14図3）は円形の浅い土壇の東壁で、生後9～10ヶ月の乳児の歯が布に付着した状態で出土した。出土位置での銭貨の上下関係は、上から祥符通宝（裏）・元祐通宝（表）・皇宋通宝（表）・熙寧元宝（表）・元祐通宝（表）・皇宋通宝（表）で、第13図62～67の順であった。いずれも北宋銭である。

また、火葬墓で銭貨を伴ったのは第1号火葬墓しかなく、他は銭貨ばかりか副葬品もなかった。第1号火葬墓の銭貨は火を受けた7枚がバラバラの状態で出土した。これも棺に遺体を納めた後、六道銭として副葬し、火葬に付した結果であろうか。

〔四〕 金属製品（図版第6図1・5～7 第14図1・4～6） 銅製容器1点、針状のもの1点、和釘2点が土葬墓などから出土している。第14図1は銅製の身と蓋が一つになった容器で、第36号土葬墓から出土した。出土状況は底部を上にし、底の上に天禧通宝、蓋の下に聖宋通宝の銭貨に挟まれていた。青銅による腐蝕が著しく蓋と身が離れず、蓋に布片と木質片が付着していた。4は第34号土葬墓から漆器と一緒に出土した針状の金属品で、断面が円形を呈するところから縫い針と思われる。5は頭部と基部を欠いた和釘と思われるもので、火葬場推定跡出土である。6は第1号火葬墓の焼骨中に混じっていた断面四角形の和釘で、水洗作業中に発見された。基部は欠損していたが、頭部は片側鍛造の打ち出しによって造られ、平らな面がみられる。5・6共に火を受けたと思われるところがあり、木の棺に遺体を納めて火葬に付したことを物語るものであろう。



第14図 金属製品

14 中世の土器 (図版第6図11・12 第15図)

三貴梨出土の中世に属する土器類としては珠洲系土器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器があるが、出土点数は9点と少ない。

●珠洲系土器 (第15図2・5) 2点とも火葬場推定跡出土で、摺鉢(2)と甕(5)の2器種がある。摺鉢の口唇部内面は広く、摺目は7本以上で、摺目条線の間隔が広い。摺鉢はこれから14世紀後半から15世紀前半に比定されよう。

●瀬戸・美濃系陶器 (図版第6図11・12 第15図4) 第15図4は口縁部に綠釉がかかった皿で、底部に回転糸切り痕を残している。図版第6図11・12は瀬戸黒の天目茶碗の口縁部破片で、胎土は淡い鼠色を呈する。いずれも15世紀に比定される。

●土師質土器 (第15図1・3) いわゆる赤焼土器といわれるものが4点出土している。いずれも回転糸切りの底部で、灯明皿かどうかは不明である。胎土は細かく緻密で、色調は明褐色を呈する。

(二) その他の遺物 (図版第6図4・8~10) 土葬墓中から木片2点、漆膜7点が出土している。4・8は第9号土葬墓から6枚の銭貨が3枚ずつに分れて付着していた木片である。9は第12号土葬墓出土の木片で、銭貨6枚が付着していた。板材はいずれも約2mmの厚さであった。材質は杉材を利用していると思われる。10は第39号土葬墓出土の薄皮状の漆膜の断片で、黒地に2条の赤線で糸を描いている。漆が塗られていたと思われる木質部は遺存していないが、弧状の赤線から木柄ではないかと考えられる。漆膜は第39号土葬墓以外からも断片ながら出土している。いずれも土葬墓出土 (第12・22・27・28・31・34号) で、漆膜を出土した土葬墓で遺体が残っていたのは第22・27・34・39号の4例である。漆膜の色調は片面が黒、片面が赤の漆であった。漆膜が断片であり、漆膜に文様が見られないことから、木柄の漆であったものかどうかの特定ができない。

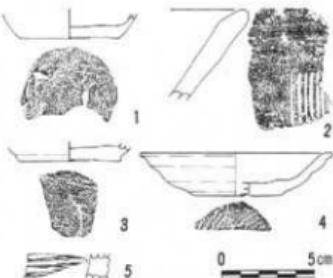
(小林)

3. 近世の陶磁器 (図版第6図13~19) 遺跡の表上から18点の近世陶磁器が採集されたが、出土しているが、土葬墓などの遺構に伴ってはいなかった。13は越前焼の甕の口縁部破片で、胎土は鼠色を呈し、緻密である。14は唐津焼の鉢で刷毛目による三彩物が施されている。15~19は肥前焼の皿や茶碗類で、17世紀後半から18世紀前半に比定される安物のいわゆる「くらわんか手」といわれるものである。

この他、図示しないものの胎土が乳白色を呈する特徴を持つ瀬戸系磁器の茶碗や皿などを始め、16点の近・現代の陶磁器が出土している (註)。

(小林)

註 なお、中・近世、近・現代の陶磁器については、戸根与八郎氏の御教示を賜った。



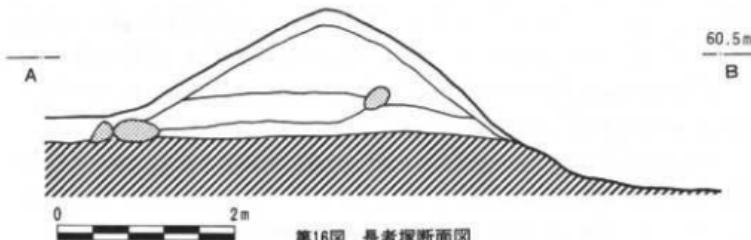
第15図 中世の土器

4. 長者塚（第16図～第18図）

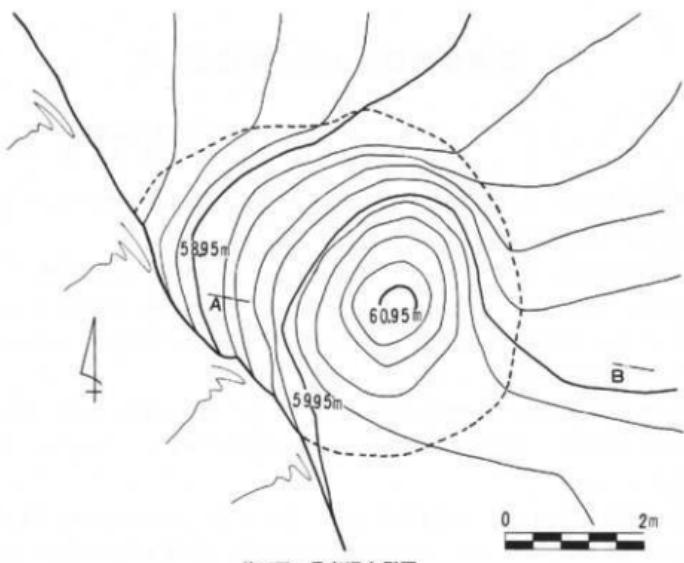
南北朝の動乱のころ、越後にきて死亡した親王の墓との伝承をもつ長者塚は、三貫梨遺跡の縁辺部で、台地北西端の段丘崖の上に立地している。長者塚の平面形態は西側が切り立った段丘崖で、北側が台地を切断する沢へ続く傾斜地となっているため、南北に細長く、北西に裾が広がった不整円形を呈し、断面形は頂部が丸味をおびた三角形で、全体形態はほぼ円錐形である。規模は直径がほぼ5mであるが、地形の関係で北西の裾部を含めた直径は6m近い数値である。高さは南の低いところで約80cm、北西の傾斜する裾部からは260cmを測る。長者塚は地元民が祭祀の対象としてきたもので、周辺は開墾の手が入らない雑木林であった。また、長者塚全体は小石から拳大もしくは人頭大の礫で覆われていた。この礫は塚の盛土が崩れ落ちないための葺石か、台地を開墾したときに出土した礫を塚に投げ込んだものか、もしくは信仰を集めていたため石を積む風習があったのかは定かでない。ただ、三貫梨には長者塚のほかに小規模な塚があり、確認調査時に発掘したところ開墾時の礫を積んだ塚であった、ことを付記しておきたい。

長者塚は地山の黄褐色土を盛上げたもので、サラサラしており、しまりはなかった。基底部もしくは基底部近くに人頭大の礫が数個置かれていた（第16図）。第18図は基底部と推定した部分であるが、地山であるか否かの判断は南東部にある3個の礫と、上部にひとかたまりの人骨があったビットの確認位置をもってした。基底部のビットは塚のほぼ中央部にあり、前述のように片手に収まる程の人骨がビットの上面から出土した。このビットが長者塚に本来的に伴うものかどうかの判断はつきかねている。それは長者塚が縁辺部とはいえ、中世墓地の一角に位置するところから、墓地のうち小児用の土壙墓の可能性も否定できないからである。同じことは南東側の礫群にもいえ、こちらも墓地の礫かもしれないである。

のことから、長者塚はどちらかの目的をもってつくられた塚であり、三貫梨の墓地が造営を終えてから築かれたことはほぼ誤りないところであろうが、確実な出土品や遺構が検出されないため、長者塚の性格は不明である。
(駒形)



第16図 長者塚断面図



第17図 長者塚全側図



第18図 長者塚基底部

IV. 三貫梨遺跡出土の人骨について

日本歯科大学新潟歯学部講師
歯学博士 高橋正志

三貫梨遺跡から出土した人骨の内、性別および年齢を査定できる部位が保存されていた標本について、その鑑定結果を報告する。

なお、歯の記号の、—は上顎右側、—は上顎左側、—は下顎右側、—は下顎左側を示し、1は中切歯、2は側切歯、3は犬歯、4は第一小白歯、5は第二小白歯、6は第一大臼歯、7は第二大臼歯、8は第三大臼歯、aは乳中切歯、bは乳側切歯、cは乳犬歯、dは第一乳臼歯、eは第二乳臼歯を示す。

第1号土葬墓標本：土葬骨。右側側頭骨乳様突起がやや大きい点から男性の可能性が高い。4の咬耗度が第2度で、6と7は生前に脱落し歯槽が新生骨梁で埋められている点から50～60歳と考えられる。

第3号土葬墓A標本：土葬骨。外後頭隆起の突出がほとんどなく、右側側頭骨乳様突起がやや小さい点から女性と考えられる。歯の咬耗度は4が第3度、8が第1度である点から50～70歳と考えられる。

第3号土葬墓B標本：土葬骨。外後頭隆起の突出がほとんどなく、右側側頭骨乳様突起が小さい点から女性と考えられる。頭蓋冠の縫合が外板で存在し、内板で消失が始まっている点から30～40歳と考えられる。

第4号土葬墓標本：土葬骨。外後頭隆起の突出が少なく、右側側頭骨乳様突起がかなり小さい点から明らかに女性と考えられる。1が生前に脱落し、5の咬耗度が第1度で、頭蓋冠の縫合が内板で消失し、外板で消失が始まっている点から50～70歳と考えられる。

第5号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。7と8の咬耗度が第1度である点から40～60才と考えられる。

第11号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。6と7の咬耗度が第2度に近い第1度である点から30～50才と考えられる。

第16号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。エナメル質の二次石灰化がeで未完了で、eで完了している点から生後9ヶ月以上10ヶ月未満と考えられる。

第19号土葬墓標本：土葬骨。左右側側頭骨乳様突起がきわめて小さい点から明らかに女性と考えられる。7の咬耗度が第2度で、6、7、8が生前に脱落している点から50～70歳と考えられる。4の近心舌側部と4の遠心頬側部が異常に多く、咬耗し、咬合させると両者の間に空隙が生じる。これは、例えばキセルをいつもくわえていた、というような習慣によるものと考えられる。

えられる。

第20号土葬墓標本：土葬骨。右側側頭骨乳様突起がきわめて大きい点から明らかに男性と考えられる。8 7 6が生前に脱落し、頭蓋冠の縫合が内板・外板とも消失している点から50～70歳と考えられる。

第21号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。eのエナメル質の二次石灰化が完了し、未咬耗である点から生後9ヶ月以上16ヶ月未満と考えられる。

第22号土葬墓標本：土葬骨。左右側側頭骨乳様突起が大きい点から男性の可能性が高い。2 1 1 2の咬耗度が第2度で、8 8がわずかに咬耗している点から30～50歳と考えられる。

第23号の土葬墓標本：土葬骨。左側側頭骨乳様突起がかなり小さい点から女性と考えられる。4 3 2 1 1の咬耗度が第2度で、8 8が第1度であるから50～70歳と考えられる。

第24号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。8のエナメル質の二次石灰化が完了し、未咬耗である点から12歳以上であり、30歳以下の可能性が高い。

第25号土葬墓標本：土葬骨。右側側頭骨乳様突起が一部破損しているが、比較的大きい点から男性の可能性が高い。6と6 6の咬耗度が第2度である点から50～70歳と考えられる。

第27号土葬墓標本：土葬骨。右側側頭骨乳様突起が一部破損しているが、比較的大きい点から男性の可能性が高い。6 6と6の咬耗度が第2度である点から50～70歳と考えられる。

第29号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。3のエナメル質の二次石灰化が完了し、1 1が未咬耗である点から6～7歳と考えられる。

第32号土葬墓標本：土葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。6がわずかに咬耗し7のエナメル質の二次石灰化が未完了である点から、6～8歳と考えられる。

第33号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。歯の咬耗度は1が第2度で、6 6が第2度に近い第1度である点から30～50歳と考えられる。

第34号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。7のエナメル質の二次石灰化が完了し、8が未咬耗である点から7歳前後と考えられる。

第36号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。6 6のエナメル質の二次石灰化が完了し、e eの咬耗がわずかである点から2～3歳と考えられる。

第37号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。歯の咬耗度は4が第2度で、6が第2度に近い第1度である点から30～50歳と考えられる。

第39号土葬墓標本：火葬骨。性別を断定できる部位の骨が残存しない。8のエナメル質の二次石灰化が完了し、未咬耗である点から12歳以上で、30歳以下の可能性が高い。

V. まとめ

1. 縄文時代の三貫梨

三貫梨からは少ないながらも縄文時代の遺構・遺物が発見され、栖吉川右岸の小規模な河岸段丘を舞台に縄文前・中・晩期の人々が生活したことが確認された。だが、縄文時代の生活痕跡に中世の墓が掘られたり、その後の開墾によって生活痕跡が大きく変化を受けていると思われる。そのため、表土面から地山面までの堆積土が10~15cmと薄く、第Ⅰ土葬墓群近くの埋甕（図版第2図1）のように胴下半部以下しか残っていないことや遺構・遺物の量が少ないなどの現象になったものと思われる。また、調査地が国道の法線に限られていることもあって、縄文時代の全体像を探ることを困難にさせている。

その中にあって、今次調査で得られた資料で特色すべきものは縄文前期後半の土器があげられる。出土量は10点以内とごく少量であるが、金倉（前半の羽状縄文土器・註）の1遺跡しかない長岡ではこれで1例が増加されたことになった。また、同じことは晩期中葉の土器にも言え、3例しかない晩期遺跡の資料に三貫梨が加わることになった。特に、前期の例は長岡における縄文土器編年上の空白部分を埋める点でその意義は大きいと思われる。

その他、三貫梨からは前期のビットや晩期の土壙の検出をみているが、時期不明のビットや埋甕と同じくその性格は、一部のビットが規模や形態から竪穴式住居の柱穴と思われるほかは不明である。

（駒形）

註 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館 1965年

2. 中世の墓地について

三貫梨遺跡で検出された埋葬墓は土葬墓と火葬墓の2種類がある。土葬墓は長方形、楕円形、円形の土壙に遺体をそのまま埋葬したもので被葬者の年齢によって乳幼児用の円形土壙、小児用の一辺90cm未満の長方形もしくは楕円形土壙、成入用の一辺90cm以上の長方形、楕円形の土壙に使いわけている。また、この墓地は男女の別なく埋葬されていることから、共同墓地の可能性が高い。土葬された遺体が形態が判明している土葬墓のはほとんどが、頭を意識的に北側にして右肩を下に向ける「北首西顎」の右側臥屈葬の方法で埋葬されていて、これにはずれるのは第6・7号の2例しかなかった。土葬墓の上面や遺体の上に直接河原石がみられた例は18基で、特に第II土葬墓群に多かった。このうち第23号例のように遺体の胸部付近に河原石がのせてあるのは抱石葬かとも考えられる。土葬墓上面の河原石は複数であり、墓標もしくはそれに近い性格のものであったと思われる。三貫梨は地山面までの堆積が10~15cmと浅く、開墾で他の墓壙上の礫が撤去されたとも考えられる。これは三貫梨の畑地の数ヶ所に見られた礫を積あげた開墾塚の存在からも考えられよう。なお、12~30才の火葬された

歯が出土した第24号土葬墓のように土壙の側壁全面を河原石で覆っている例はこれしかなく三貫梨でも特異な例であった。遺体の遺存をみなかったが、第9・12号土葬墓からは銭貨の形状とほぼ同じ形の板材が残っていた。これは木棺に遺体を納めたのち、埋葬されたとも考えられるが、木棺を打ちつけた釘等が出土しないため、銭貨を納めた副葬品の小箱の可能性もある。ただ、土葬墓の掘り方で、隅が角張っているものが多いところから、木棺使用の可能性も否定できない。

火葬墓で下に細長くて浅いピットをもつものが2例あった。これは人間が一人入れるほどの大きさで、木炭の量が多いことから、その場で火葬に付し、埋葬した場所ではないかと思われる。下部に複数の土葬墓がある第1号火葬墓は火葬骨・木炭とも群を抜いて多く、ここも直接火葬をし、埋葬した場所と考えられる。第1号火葬墓はこの他に、他所で火葬にした遺骨を灰と共に捨てた「捨て墓」の可能性もある。この他、高橋氏の鑑定で、土葬墓出土の人骨が土葬ではなく火葬によるものとされたもののうち第33・34・36・37・39号土葬墓は火葬墓が群在している下にあるところから、火葬墓の一形態とも考えられるが、土壙が火葬の遺骨や灰を納めたにしては大きすぎる点に一抹の疑問を感じている。

なお、土・火葬墓の造営年代は出土銭貨から大差はないが、火葬墓の下に土葬墓が位置する例が第II土葬墓群に多くあるところから、ほぼ同じ時期の中で少しだけ火葬墓が新しいと考えられる。埋葬の風習が変化したのは宗教上の理由からであろうか。

土・火葬墓の副葬品の小型の銅製容器や木挽の漆膜と考えられるものなどがあるが、群を抜いて出土したのは北宋銭等の流来銭である。銭貨は特に六枚一組の六道銭として納められることが多い。長岡市中山5号塚（註1）や小千谷市竜ヶ池觀音堂塚群（註2）でも六道銭の副葬があり、長岡周辺では既に中世からこの風習があったことを示していよう。139枚の銭貨で最も多いのは「北宋銭」と総称される銭貨で、なかでも皇宋通宝・元豐通宝・元祐通宝の三種が多い。この傾向は是光吉基氏の編年（註3）によれば3期1類に比定され、時間的には15世紀前半に多く見られると言う。

また、遺跡東で、一段低いところの焼土の面をもって火葬場跡と推定したが、遺骨や灰それに木炭などが全く発見されず、一抹の不安を覚えている。しかし、木棺を打ち付けたと思われる釘が出土していることや、集骨の段階で遺骨のほかに灰や木炭などもすべて取り上げて常に火葬場をきれいにしていた可能性も考えられることから、ここを火葬場と推定した。今後の調査例の増加をまって結論を出したい。
(小林・駒形)

註1. 駒形敏朗他「中山5号塚」長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書 長岡市教育委員会

1978年

2. 池田享他「竜ヶ池觀音堂塚群」緊急発掘調査報告書 小千谷市教育委員会 1982年

3. 是光吉基「出土渡来銭の埋没年代」月刊考古学ジャーナルNo249 1985年

3. 三貫梨墓地の被葬者の性格について

次に中世の墓地についてこれまでのことをまとめながら、被葬者の性格を考えてみよう。

まず地形だが、後背地にはその一角に古志長尾氏の柄吉城跡がある東山丘陵が連なり、前面の沖積地への見通しが鉢伏および悠久山によって遮られている柄吉川右岸の河岸段丘上にあること。柄吉川を挟んで対岸の鉢伏は榎脱莊、柄吉は高波保上条に属していると思われる。墓地は大別して土葬墓と火葬墓の2種類があり、火葬墓の方が時間的に新しいこと。土葬墓は規模・形態でいくつかに分類され、人骨の鑑定からそれらは年齢の差によるものと思われること。土葬墓・火葬墓とともに北宋錢などの渡来銭が6枚一組の六道錢として副葬されていることが多いが、他の副葬品には第36号土葬墓の銅製容器しかないこと。ところが、第16号土葬墓の布、第12・27・39号土葬墓などの漆、第9・12号土葬墓の木片が土葬墓の底面にあったこと。調査面積は遺跡面積のほんの少しにすぎないが、土葬墓・火葬墓とともに位置的に数グループに分かれること。墓地が営まれた時期は出土銭貨から15世紀から16世紀にかけてと思われる。中世の墓地に多く見られる五輪塔や宝篋印塔などの石塔類はその一片すら出土しなかったこと(註1)。長者塚は墓地の造営が中止した後に築かれたと思われ、中世のものとは考えられないこと。などなどが、今次調査で得られたことがらである。

また、地元では三貫梨の地は金原大膳の居館跡と伝えられていること。作成年次は不詳であるが、文明年間の事項が記載されている「長尾・飯沼氏等知行検地帳」(「新潟県史」資料編4、777号)の「飯沼彈正左衛門尉分高波保」の項に「本田四百三拾戸 同領千坂村馬守被官金原新右兵衛」「本田菴万百六十七束式把薪柄吉 同領金原」の記載を見ることができる。この「金原」は地元の伝承に残る金原大膳とあい通じる名である。地元の伝承はこの他に、この金原大膳が出生して大行寺(ダイギョウジ)を建立して三貫梨城と渡り廊下で結ばれていたし、この大行寺はその後古志長尾氏が祈願所としたと言われている普濟寺に名を替えて法灯を継承していると言う。

この古志長尾氏が藏王堂城から根拠地を移したのは明応7(1498)年、越後守護上杉房能が都司不入破棄を打ち出したことで、藏王堂城のある大島莊の権限をめぐって守護代長尾能景から房景がクレームをつけられたことを契機としたといわれている(註2)。それ以前に柄吉を含めた高波保上条を所領していたのは「長尾・飯沼氏等知行検地帳」によれば、守護代能景や飯沼氏・金原新右兵衛・普濟寺など、上杉氏の家臣およびその被官や社寺などで古志長尾氏の名は出てこない。ところが、大永7(1527)年の「豊州段銭日記」には古志長尾氏の房景の所領として柄吉9町9段半が最大のものとして記載されている。これは房景が柄吉を所領としていたことを物語るものであろうし、房景の父とみられる孝景の時代に作成されたと思われる「長尾・飯沼氏等知行検地帳」に、柄吉に古志長尾氏分の記事が無いからといって端的に文明年間には柄吉を治めていなかったとはいいけないだろう。おそらく、未発見史

料の中に「長尾・飯沼氏等知行検地帳」のほかに、古志長尾氏の古志郡に関する検地帳があった可能性を否定することはできないだろう。それでなければ、大永7年の「豊州段鉄日記」に栖吉一村分に相当するといわれる9町9段半の記事に直接結びつかなくなるであろう（註3）。つまり15世紀末もしくは16世紀初めまでは金原新右衛門などの地侍や普濟寺などの社寺のほかに古志長尾氏も栖吉を本領とするほどの所領を持っており、古志長尾氏が藏王堂城から根拠地を栖吉に移し、直接に栖吉を支配したものと思われる。それにもかかわらず、栖吉には金原氏などの被官クラスの地侍がいたと思われる。そして、古志長尾氏が「御館の乱」（1578年）で滅ぶまで栖吉を支配していた。その後は上杉景勝の番城となり、慶長3（1598）年の会津移封に伴って栖吉城は廃城になった。

これらのことを踏まえて墓地を造営した被葬者たちの性格を探ってみよう。当時の階層は長尾氏などの支配者層、金原氏などの被官と称される地侍層、それに百姓層に大別されよう。このうち支配者層は普濟寺などの祈願所に墓を造って、そこに葬ったと思われる。惣の中心となった地侍層、あるいは百姓は死者をどこに埋葬したのであろうか。一つには屋敷内の埋葬が考えられる。また、共同の埋葬地があり、そこに葬ったことも考えられる。最近、これら地侍層が中心となって結成した惣の共同墓地（惣墓）についての研究成果がある（註4）。それを考慮して三貫梨の墓地をもう一度みてみよう。

三貫梨の墓地は土葬墓が3群、火葬墓が2群に別れ、副葬品にあまりみるものがないこと、三貫梨は高波保上条であり、栖吉川の対岸に櫛脱荘の跡が至近距離にあることなどは前にみたとおりである。櫛脱荘は「長尾・飯沼氏等知行検地帳」によれば、依田左近将監や三宅出雲守・石坂三郎次郎などの武将や満願寺等の寺社で39筆分を持っている。しかし、長尾氏は守護代の能景が一筆を所領しているにすぎず、古志長尾氏はここでも出てこない。吉井氏の研究によれば、惣墓は莊や保の境界近くで、五輪塔や宝篋印塔などの石塔を中心に惣を結成している村落単位ごとに位置をかえて墓を設けている例もあるという。三貫梨は石塔の類は発見されないが、墓に群が認められ、墓地の位置が高波保でも櫛脱荘に近いところにあることなど、その形態は惣墓に近いものと思われる。が、調査中に現地を訪れた吉井氏によれば、惣墓は眺望のよい場所を選定しているという。眺望の点では沖積地を望むことができない三貫梨はその範囲から除かれよう。また、惣墓は惣が結成されていることが大前提であるが、越後——特に長岡周辺で惣に関する記録が残っていない。この点からも惣墓の定義から外れるかもしれない。だがしかし、「長尾・飯沼氏等知行検地帳」には高波保上条や櫛脱荘に金原氏や依田・三宅・石坂氏などの記載があり、被官クラスの地侍と考えられる層の存在を示唆していると思われる。古文書に惣の結集についての記録が無いといって、長岡周辺には「惣」が見られないと言い切ることはどうであろうか。今後の調査を待たなければならぬが、近畿地方で言うところの「惣」に近いものの存在を、三貫梨の墓地から推定するのも一

つの方法ではないだろうか。いずれにしても、三貫梨の墓地は近畿地方の悲墓に類似する点が少なからずもあり、三貫梨の被葬者を探る手掛かりには、この悲墓の概念を念頭に置かなければならぬと思われる。悲墓であれば、御館の乱で滅亡した古志長尾氏の被官クラスの地侍層か、景勝の会津移封に伴って移動した地侍層か、秀吉の刀狩り(1588年)もしくは身分統制令(1591年)で百姓クラスに身分を移した地侍層の可能性も否定できない。これは三貫梨墓地の造営が中世に限られていることとも強く関連し、かつ墓地の構成に高波保や植脱莊などの各地の地侍層ごとと思われるグループが見られることから考えている。

ところで、北蒲原郡中条町の韋駄天山墳墓の被葬者に付いて再検討を行った研究が最近発表されている(註5)。それによれば、從来三浦和田氏の一族の墓地と間違づけられていた韋駄天山墳墓を荒河保地頭河村一族の墓所と考え、韋駄天山の位置を奥山莊と荒河保の境に比定している。ここで注目されるのは被葬者の性格ではなく、韋駄天山墳墓の位置をもって莊保の境としていることである。享保17(1727)年には既に「郡境塚」の名称が韋駄天山付近に記している絵図があるという。三貫梨と韋駄天山では土葬と火葬、土壤と塚、立地、石塔の有無、副葬品などに相違がみられるが、両者とも中世の墓地には変わりなく、莊保の境に設けられていることは一致している。このことはひとり三貫梨の被葬者の性格を探る手掛かりになるばかりではなく、今後このような莊保の境界に墓地が造営される意味についても考察しなければならないであろう。

今次調査は遺跡の約16%(推定)にすぎない面積が対象であるだけに、被葬者の性格をめぐる諸問題は今次調査で提起され、その解決はまだこれからである。今次調査で明らかになった考古学上の点は、中世の柄吉では柄吉城跡の他に集団墓地が発見され、往時の生活領域の一端が判明したにすぎない。今後の調査・研究に負うところが大きいことを明記し、先学諸氏の御教示を仰ぎたい。

(駒形)

註1. 一般に中世の墓地においては石塔類の他、木製卒塔婆の使用が考えられる。三貫梨でも木製卒塔婆は考えられるが、土壤が酸性を呈するためであろうか、腐朽して残存していないかった。このため、木製卒塔婆存在についての議論は差し控えたい。

2. 阿部洋輔「古志長尾氏の郡司支配」歴国大名論集9 上杉氏の研究 1984年

3. この辺のくだりは阿部洋輔氏の御教示によるところが多いが、あくまでも文責は駒形にあることを明記しておく。

4. 吉井敏幸他「中世葬送墓制の研究調査概報」(財)元興寺文化財研究所 1984年

吉井敏幸他「中世葬送墓制の研究調査概報(昭和59年度)」(財)元興寺文化財研究所 1985年

5. 田村 裕・丸山淨子「『蓮妙之非人所』考——越後國奥山莊・荒河保研究の(一)——」

新潟大学教育学部紀要第26卷第2号 1985年

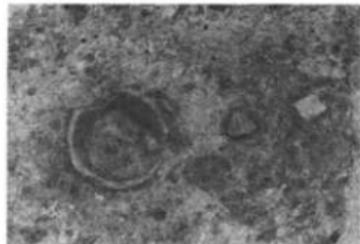


西より東側を望む



南東より北西側を望む

遺跡遠景



1. 埋壺（縄文時代）



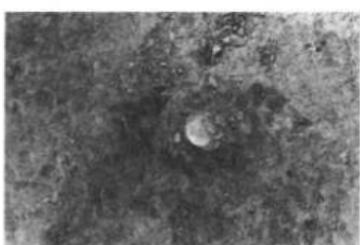
2. 縄文土器（土塊）



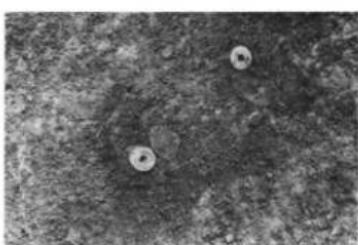
3. 銅製容器（第36号土葬墓）



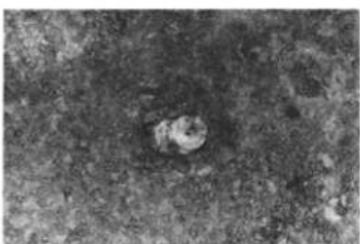
4. さし銭（第17号土葬墓）



5. 布包みの銭貨（第16号土葬墓）



6. 銭貨と板（第12号土葬墓）



7. 銭貨と板（第9号土葬墓）



8. 銭貨（第1号火葬墓）

遺物出土状況



第Ⅰ土葬墓群



第Ⅱ土葬墓群



第Ⅲ土葬墓群

土葬墓群

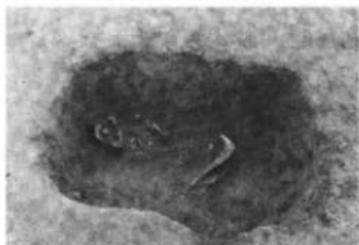
図版第4図



1. 第23号土葬墓



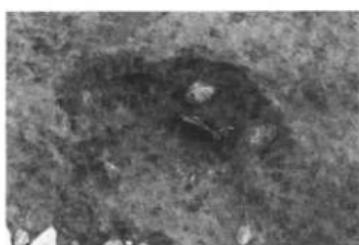
2. 第23号土葬墓（石を取り上げたところ）



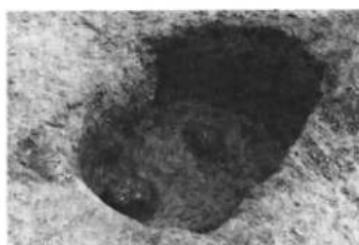
3. 第1号土葬墓



4. 第4号土葬墓



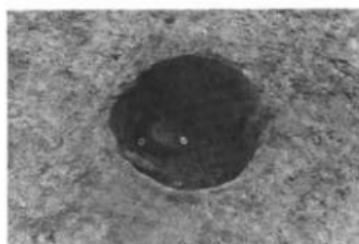
5. 第6号土葬墓



6. 第25号土葬墓

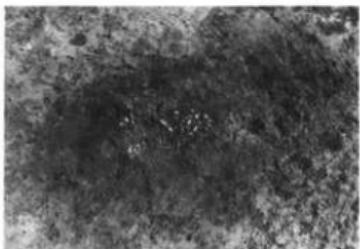


7. 第19号土葬墓

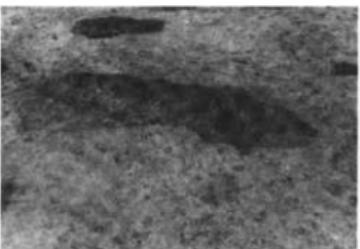


8. 第14号土葬墓

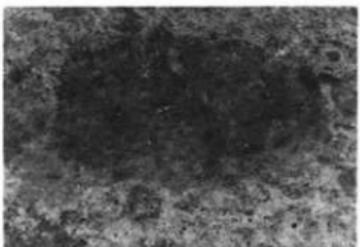
土葬墓



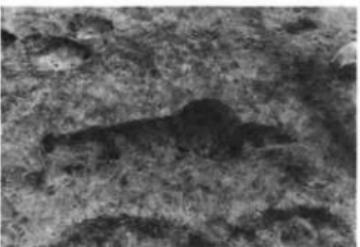
1. 第5号火葬墓



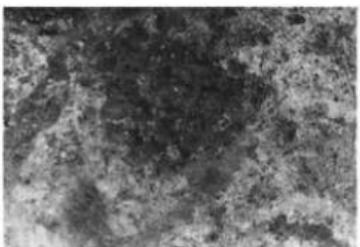
2. 第5号火葬墓下のピット



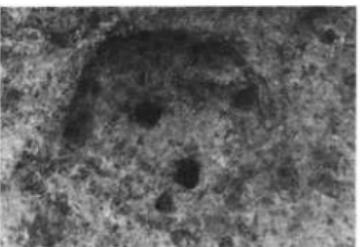
3. 第8号火葬墓



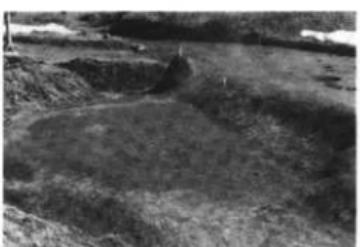
4. 第8号火葬墓下のピット



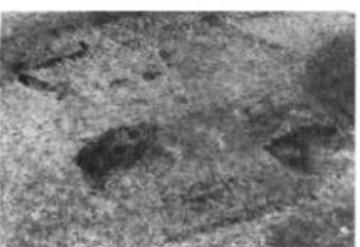
5. 第6号火葬墓



6. 第6号火葬墓下のピット



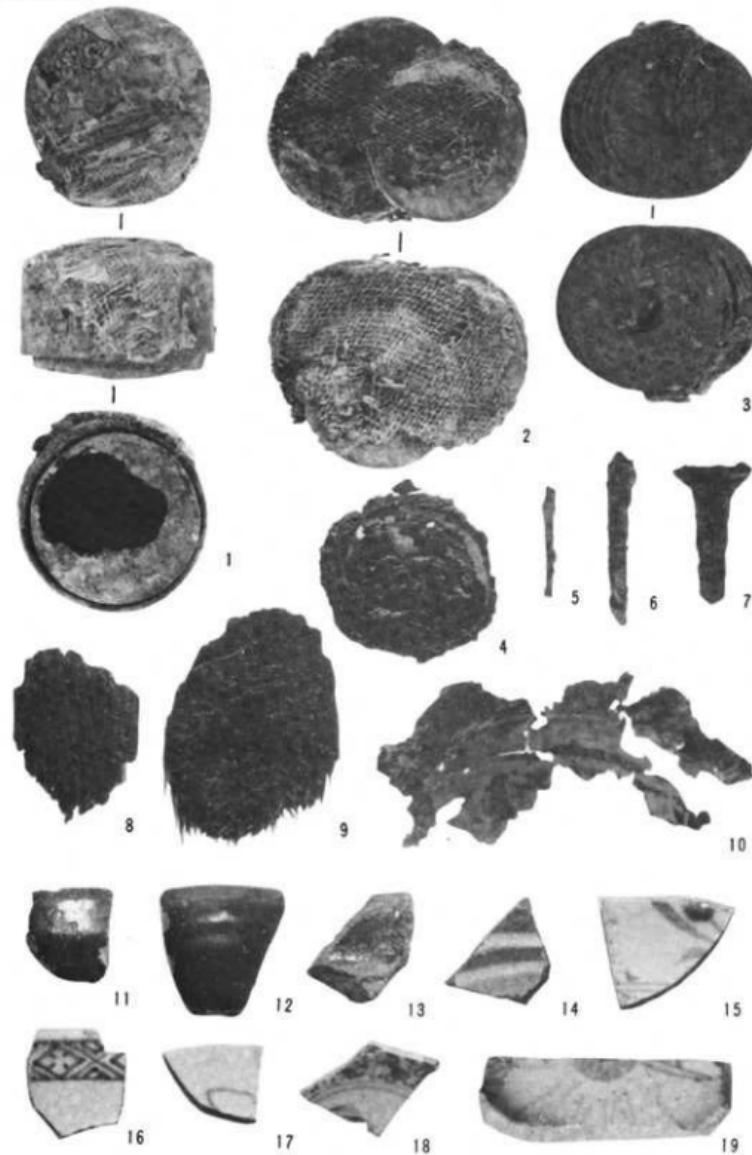
7. 火葬場推定跡



8. 火葬場推定跡土塊群

火葬墓・火葬場推定跡

図版第6回



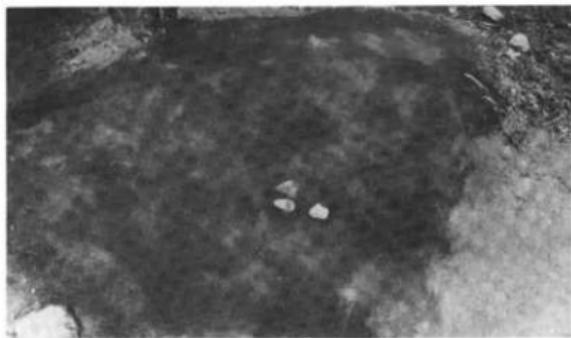
出土品



全景



断面



基底部

長者塚

三貫梨遺跡

—第1次発掘調査—

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月30日 発行

発行 長岡市教育委員会

印刷 総合印刷 KK 中 越
長岡市学校町3-9-5